
暗黒神話

トウリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗黒神話

【Nコード】

N2088Y

【作者名】

トウリン

【あらすじ】

報酬をもらって気が向きさえすれば、どんな仕事でもやるよろず屋・黒木康平<くるき こうへい>。彼がある日目覚めたら、隣に少女が寝ていた。彼女は未明<みあか>と名乗り、しばらく彼女を預かるように依頼したというのが……。ただ無為に過ぎていた黒木の世界は、未明と出会い、彼女を軸に巻き起こる異様な事件に遭遇することで大きく動き出す。

三部構成になります。

のべぶろ！(<http://www.novepro.jp>) に投

稿した作品です。

序（前書き）

実在の場所やそれを示唆する表現が出てきますが、想像90%で書いています。「何か変」「これは違う」と思われた方や不快に思われた方がいらっしやいましたら、「ご一報ください」。

序

朝起きると、隣に女が寝ていた。

そんな事態は、彼、黒木康平<くるぎ こうへい>にとってはそう珍しいことではない。同衾の相手が、どう見ても胸も腰もない、二次性徴の欠片もない、という子どもであることを除けば。

「どういうことだ……こりゃ……？」

呟いた康平は、昨夜を思い出すべく必死に頭を回転させる。勢いに乗って呑み過ぎたせいか、なかなか記憶は蘇えってきてくれなかったが、脳味噌を絞るうちに深海から浮き上がってくる泡のように、おぼろげな状況が見えてくる。

そう、帰り道で一人佇む女性を見かけ……。

「確か……声を掛けた時は、美人のお姉ちゃんだったよなあ」

ぼやいた康平の疑問に、下から幼い声が返る。

「それ、私の姉よ」

両肘を突いて上半身を起こした少女が、面白そうに康平を見ていた。二つに分けてお下げにした栗色の髪に、猫のような栗色の瞳。明らかにガイジン顔ではないのだが、東洋人のものとも違う、国籍不明の顔立ち。確かに、昨夜の美人の面影をどことなく残している。

身に付けているのは、康平のＴシャツのような気がするが。

「で、そのお姉さんは？　なんだってまた、お嬢ちゃんが俺のＴシャツ着て俺と一緒に寝ているわけ？」

そう、それが今の彼にとって一番大事な問題だった。

「忘れちゃったの？　昨日、あなたの方から姉に声をかけてきたでしょう？　何か困ってるのかって。で、姉が私のことを頼むってあなたに言ったら、あなたは任せとけて、胸を叩いたじゃない」

「そう、だっけ？」

「うん。それに、ほら、そこに報酬置いてあるでしょ」

確かに、妙齡の女性に自分の仕事の話をしたのは覚えている。だが、彼女に仕事を頼まれたという記憶は、その部分だけすつぽりと抜け落ちていた。

指差された先を辿ってみると、サイドボードの上に手のひらに載るほどの袋がある。開けてみると色取り取りの宝石が詰まっていた。全て本物だとすれば、康平の数年分の稼ぎに匹敵するかも知れない。「まずいぞ、俺。あの程度で記憶をなくすとは……年か？」

齡二十九にして自らの肉体の限界を知ってしまったのかと頭を抱える康平に、少女が右手を差し出した。

「じゃあ、よろしくね。私はみあかつて言います　未明って書いて、みあかつて読むの」

一度引き受けた仕事を投げ出すのは、信用第一である康平の看板に泥を塗ることになる。そもそも、彼は依頼者の『理由』には興味がない。報酬がもらえて、康平の気が向けば、依頼を受ける。そして受けたからには全うするのが彼の方針だ。

今回も、受けたというならやるしかないだろう。

まだ子どもらしい柔らかさが残るその小さな手を、康平は溜め息を吐きつつ取る。

実のところ依頼の内容さえよくわからない、万屋くよろずや・黒木康平であった。

この少女の手を取ったことが自分にとって大きな変換点となることは、この時、彼は夢にも思っていなかった。

何故、俺はこんなことをしているのだろう。

康平は真面目に自問していた。

手は、二人分の朝食にするため、一つのフライパンで同時にスクランブルエッグをかき回し、ウインナーを炒めている。

そう、朝食を二人分用意するようになって、すでに三日が経とうとしているのだ。

その間、未明の姉という女は、全くの音信不通である。いったい、どんなつもりなら、こんないい年をした男のところにならずか十歳の妹を置き去りにできるのか。生憎と康平にその趣味はないが、このご時勢、十歳の少女でもペロツとイかれてしまう可能性は充分にあるというのに。

件の少女は今日も目覚めると同時にパソコンの前に陣取り、ネットで次から次へと、色々なサイトを覗いていつている。暇つぶしにでも、と思ってパソコンを貸してやったら、すっかり病みつきになったらしい。三日間、起きている間は殆どパソコンの前にいる。

モニターだけでなくホログラフィも使っているから、キッチンからでも彼女が何を見ているのかが解る。あんなに移動が早くて、見ている内容をちゃんと理解しているのかと疑ったが、後で訊いてみると答えは的確だった。多分、ちゃんと頭に入っているのだろう。

「そろそろ飯が行くぞお。テーブルの上片付けて、コーヒー淹れといてくれや」

「わかった。ちょっと待って」

なんだか、妙に馴染んでいるところがいやだ。

そう思って、康平は渋い溜息をついた。

その間も手際よくスクランブルエッグとウインナーを皿に分け、レタスとプチトマトを添える。ほぼ同時に、チンとトーストが焼き

あがる音がした。

康平は片腕に二枚ずつ皿を乗せ、器用に運んでいく。

「ほらよ」

「うわあ、いいにおい。おいしそお」

トントン、と、スクランブルエッグの皿とトーストの皿を目の前においてやると、未明は目を輝かせる。飯を作ってやると、だいたいいこんな感じの反応をするので、康平は、正直、ちよっと嬉しい。

「ほら、食えよ」

「うん、いただきます！　おいしい！」

未明は、実に作りがいのある反応を示してくれる。

自分もフォークを握って食事を始めるが、目は未明の様子を注意深く観察していた。

こいつの国は何処なんだろう？

その疑問が、やはり頭に残る。

この三日間の様子をみていると、これまで日本の文化圏に住んでいなかったことは明らかだった。今でこそ『いただきます』と口にするが、始めの食事ではその挨拶も出ず、箸も全く使えなかった。風呂を用意してやってもきよとんとしており、シャワーに感激したのを見た時には、いったい何処の未開の土地から来たんだよ、と康平はツツコミを入れそうになったのだ。

日本で生活していなかったのは明らかだが　その割りに日本語は流暢だ。ネットをみている時の様子では、読むほうもできるのだろう。もしかしたら、凄まじく頭がよく、短期間で日本語をマスターしてしまったのかもしれない。

まったく、わけの解らないガキだな。

内心でボヤいて、別のことを口にする。

「で、あなたの姉さんってのは、いつ迎えにくるんだ？」

「え、ああ、姉さん？　そうね、あと三週間と少しってところかしら」

「あ、そう……三　ゲホッ」

さらりと聞き流そうとして、康平は息を吸い込み、それと一緒に入っていったトーストの欠片でむせた。ひとしきり咳をして、呼吸を整えてから、改めて訊く。

「ちよつと待て、三週間!？」

「うん、だいたい」

「ちよつと待て、姉さんはその間、何やってるんだ？」

「そうだね、時機を見てるのかな。大丈夫、遅くとも一月後には、いなくなってるから」

だから、何もいわずに置いておいて欲しい。

言外に、未明の目がそう言っていた。

この少女は、時々、妙に大人びた眼差しをする。その目でジッと見つめられると、妙に康平の胸は騒いだ。

ふい、と康平は目を逸らし、ガリガリと頭を掻いた。そして深々と溜息をつく。

「初めに引き受けたからには、最後まで面倒見るさ。お前の姉さんが迎えに来るまでは、な」

「康平!」

康平の言葉に、パツと未明の顔が輝く。

康平は、致命的に女性に弱い。年齢に限らず、女性に頼まれたら、断れない。これはもう、どうしようもないことだった。

「まあ、いい。まだしばらくいるんだったら、お前の服を買いにい
くぞ」

「え？」

「それ」

康平は、ピツとフォークで未明の服装を指す。それは、康平のTシャツを被っただけの姿だった。ワンピースのように見えなくもないが、襟ぐりは広くて薄い胸が覗き込めそうだし、裾からは小鹿のような素足が伸びている。

「ここにまだいるなら、もうちょいまともな格好しとけよ」

「別に、いいよ、このままで」

未明は自分の身体を見下ろしながらそう答えるが、即座に康平が却下する。

「俺が嫌なの」

「……もしかして、イケナイ気分になっちゃった？」

「あほ。なるかバカ。一ヶ月間、この部屋に閉じ籠っているわけにもいかないだろう？ 外に出るのに、この界限をその格好で歩いていたら、三十分で拉致られるぜ」

そもそも、何故、未明がそんな姿でいるのかといえば、彼女が何一つ荷物を持っていないからである。

なんでも、未明の姉は『悪い奴ら』に追われているらしい。逃げる途中で汚れてしまったから、彼女が着ていた服はここに来た時にすぐ捨ててしまったのだとか。

まあ、甚だ胡散臭い説明だが、康平も深入りする気はない。ろくに理由も確認せず人を匿うことなど、これまでも何度もしてきた。未明に目を遣ると、なにやら考え込んでいる。何か、気になることがあるようだった。

「どうした？」

「ん……」

「『悪い奴ら』が気になるのか？」

「まあ、ね。多分大丈夫だと思うのだけど……」

「意外に、人混みつてのは隠れるのにいいもんだぜ？ それに、そいつらが来たとしても俺がなんとかしてやるよ、ちゃんと」

康平の言葉に、未明がニコツと笑う。妙に賢しいが、こっぴどい顔をすると、年齢相当に可愛らしくなる。

「そうだね。頼りにしてるよ」

そう、口には出していたが、未明の目の奥にある憂いを、康平は見逃さなかった。

新宿はよくぞここまで、というほどの人でごった返していた。

「はぐれるなよ？ もし、はぐれたら駅に行つてジツとしとけ。この改札の所な。お互いに動き回つたら、絶対に見つからないぞ」

「解つた……けど、凄いな。今日は祭りでもあるの？」

康平のシャツと短パンをギリギリそれらしく身に付けた未明は、人混みに目を見張っている。

やっぱり、この少女は、どこか未開の地から出てきたらしい。少なくとも、新宿在住ではない。

「ここはこれで普通だろ。行くぞ」

康平は、猫の仔を摘むように未明の襟首を掴んで歩き出す。目指すのは廉価な衣料品で有名な某チェーン店だ。そこだと、インナーからアウトターまで一着千円から三千円程度で購入できるから、当座の仕度は整えられる。

「ちょ……ッ、ちゃんとついていくから、放してよ」

見下ろせば、十歳の女の子としては屈辱的な扱いに、未明が康平を睨み上げていた。

「しょうがねえな。じゃあ、これでも握つとけ」

そう言つて、康平はジャケットの裾を差し出した。二十九歳の男として、十歳の少女と手を繋いでいる絵面はあまり想像したくない。未明は素直に裾を握ると、歩き出した康平を小走りで追いかける。スイスイと人混みを縫つていく康平に、未明はついていくのがやつとである。

荒波に揉みに揉まれた未明がぐったりした頃、ようやく目当ての店に着く。

「よし、じゃあ、上を五枚、下を五枚、あと下着。適当に選べ」

子どもの服など見繕つたことのない康平がそう言うが、当の未明は店内にずらりと並んだ商品に立ち竦んでいる。

店に入ったこともないのか……？

つくづく、訳の解らない子どもだ。

「行くぞ」

康平は溜息をつくくと、未明に顎をしゃくって促し、買い物かごを手にした。

「あ、ちよつと、お姉さん」

近くにいた店員に声をかける。

「はい、何でしょうか？」

にこやかに制服を着たその女性が振り返った。彼女にかごを差し出しながらお願いする。

「この子に合いそうなやつを、適当に五着ずつくらい、選んでやってくれない？ あ、あと下着もね」

「承りました。……サイズは……」

「わからないんで、測ってやって」

「わかりました。お嬢ちゃん、こっちに来てくれる？」

微笑みながら手招きすると、フィッティングルームに誘う。

康平は、こんな子守のような真似をする羽目になるうとは、と髪を掻き回した。未だに、この依頼を受けた経緯を思い出せないのだ。声をかけた女が、やたらと美人だったことは覚えている。だが、覚えているのは顔だけだ。

自分は、何と言われて何と答えたのか。

頼まれて、応と答えて、報酬を受け取った。

依頼は確かに成立してしまっているのだが。

「まったく……」

フィッティングルームから出てきて、店員にくつついて服を選んでもらっている未明を遠目に眺めながら、康平は再度、深々と息を吐いた。

*

取り敢えず未明の着替えは買い揃え、衣料品店を後にした二人は帰り道についていた。

帰りもやつぱり、物凄い人の波である。

荷物は半分ずつにしたが、それでも歩き難さは手ぶらだった行き
の比ではない。

未明は何か頑張つて康平のジャケットの裾を握っているようだったが、不意に、裾を引つ張られる感覚がなくなった。振り返るとやはり未明の姿がない。

「ちっ」

舌打ちをして、後戻りする。はぐれたときには駅で落ち合うようにしていたが、彼女のあの様子だと、駅に着けるかどうかが疑問だった。搜してみれば、今ならまだ捕まえられるだろう。見渡せば、栗色のお下げがチラホラと人混みに見え隠れする。

「少しは踏ん張れよ」

ともすれば人の波に埋もれてしまう小さな頭を見失わないように、康平は懸命に後を追った。

しばらく追いかけて、違和感を覚える。

未明の移動速度が、速すぎるのだ。

まるで、誰かに引つ張られているような……。

そう感じ、康平は嫌な予感に襲われる。

未明の姉を追っているという『悪い奴ら』だろうか。

そう思った康平の視線の先で、フツと、未明が路地に消えていく。単に、人混みから抜けようとしただけなのだろうか？ いや、そうは見えなかった。

這這の体で人の波を抜け、未明が消えた路地に辿り着く。そこは薄暗く、迷路のように入り組んでいた。人の気配は、皆無だ。

「未明？」

声をかけても返事は無い。

康平の声が届かないほど奥に行ってしまったのか、それとも、応えられないような状況なのか……？

康平は、足を速めて一つ一つ路地を覗き込んでいった。
しばらく歩き、ようやく、ポツリと地面に落ちている、先ほど行
ったばかりの衣料品店の紙袋を見つけたことができた。

一方、康平とはぐれてしまった未明は。

慌てて彼の後を追おうとしたが、グイと腕を引かれて振り返った。見上げた視界に入った者の名前を、呟く。

「アレイス・カーレン……」

自分の腕を掴んでいるのは、身体をすっぽりと包む黒尽くめの長衣に金髪碧瞳の優男。明らかに周囲から浮いている格好だが、誰一人気に留める者はいない。

男はニツコリと優しくげに微笑むと、有無を言わず未明を引きずって歩き出す。

「ちよつと、放しなさいよ！」

言っても無駄だと解つていても、そう叫んだ。だが、周囲の注意を引く筈のその声に反応する者はおらず、未明はズルズルと連れて行かれてしまう。人の波は、無意識に二人をよけているようだった。

これは……隠行の術……？

未明の目には、二人を包む術の形式がぼんやりと映る。この術がかけられているものは、意図してそれを見ようと思つた者以外は「視界に入っていないも見えていない」状態になる。

この世界の者は、よほど他人に無関心らしい。

自分たちにチラリとも視線を向けられない人々に、未明は苦笑する。

康平が自分を捜してくれていればいいのだが、と路地に引つ張り込まれながら彼女は一縷の望みをかける。

男は、足を踏ん張る未明をもともせず、どんどん路地の奥へと進んでいく。そこは入り組んでおり、一度入り込んでしまえば、康平に見つけてもらうのは不可能なように思えた。

未明は適当な頃合で、男に気付かれないうちに一つ、二つと紙袋を落としていく。

やがて突き当たりに辿り着くと、男はようやく未明の腕を掴んで

いた手を放した。

「痛いわね」

これ見よがしに掴まれていたところをさすり、顔を顰めた。

「それは申し訳ありません。見失っていた貴女に逢えて、つい、舞い上がってしまった」

「私は、遭いたくなくなっただけだね」

そつぽを向いて、未明はそう答える。だが、そんな彼女の胸倉を、男が掴んで壁に押し付ける。

「私は、逢いたくて逢いたくて、気が狂いそうでした。残念ながら、今のお姿では役立たずですが」

「お生憎さま。まだ、当分はこの姿よ」

つま先が浮くほどに吊り上げられ、喉が詰まりそうになるが、未明は不敵な笑顔を作りながらそう答える。

「その憎まれ口も、愛おしいですね……。貴女が私のものになる時が待ち遠しくなりません」

そう囁きながら、彼は唇を寄せる。

冷たいそれが重ねられた時も、未明は瞬き一つせずに男を見据えていた。

唇を離した男が、うつとりと微笑む。

「ぞくぞくしますね、その眼差し。満月の夜に、その目で見られながら貴女を奪いたいものです」

嗜虐的にそう囁く男に対して、未明は冷笑を浮かべて嘲った。

「……コレは絶対に、あんたに渡さない。ええ、誰にも、絶対に。あんたにはこうやって触られているだけでも、虫唾が走るわ」

その言葉に、男の顔から柔らかな表情が掻き消える。

次の瞬間、未明の背中は地面に叩きつけられていた。

「……っ！」

衝撃に、一瞬、未明の息が詰まる。

薄汚い路地に仰向けにされた彼女に男が馬乗りになった。

「今のうちに、貴女の力を封じておきますね。貴女は界渡りの術を

用いた直後で、まだ回復していないでしょう？　まだ、赤子のよう
な力しか感じませんね。いつもならば、回復するまでは決して姿を
見せてくださらないのに……今回はどうなさったんですか？　まあ、
私にとってはこの上ない幸運ですが」

そう、未明としても、あと数日は康平の住処に隠れているつもり
だったのだ。あそこであれば、初日に康平が寝ている間に施した結
界で護られていたから。

油断した自分が、腹立たしい。普通であればついて来られないよ
うな界渡りだった筈なのに、この男はどんな手を使ったのか。

唇を噛み締める未明をどう受け取ったのか、男がほくそ笑む。

「貴女も、出逢ったのが『崇拜者』の彼ではなく私で、良かったと
思いませんか？　今ここにいるのが彼だったら、すでに貴女の命は
奪われ、封印が解かれていたことでしょう。ああ、そうそう、彼も
ここに来ているんですよ。何しろ、ずいぶん遠くの次元まで跳んで
くださいましたから。貴女が開いた道を使うとしても、流石に、独
りでは辿り着けなさそうだったので、彼と手を組んだのですよ。ま
あ、この世界に着くと同時にお別れましたけれどもね。貴女が開
いてくださった道を使った上に、二人で渡った所為か、私たちはそ
れほど消耗せずに済みました」

そう言いながら、彼は未明の両手首を一つにすると、片手で頭の
上に押さえ込む。大人と子ども、男と女の力の違いは明らかで、ど
んなにもがこうとも、びくともしない。

ぶかぶかな康平のＴシャツの襟が破かれ、まだ全く膨らみのない
胸元が露わにされた。

男は自らの小指の先を噛み破ると、そこから滴り落ちる血で未明
の肌に文様を刻み始める。

術が完成してしまう！

術をかけられても解くことは可能であろうが、男の術が自らの身
体に浸透していくことそのものがおぞましい。

未明が身を震わせた時。

唐突に、男が飛びのいた。彼の身体があつた空間を何か飛び過ぎ、ガツツとかなり激しい音を立てて突き当たりの壁にぶち当たる。未明と男は、ほぼ同時に、その物体が飛んできた方へと首をめぐらせた。

「康平……」

二人の視線を受けた康平は、手の中のコンクリート塊を弄んでいる。

「その外人さん。あんたのお国じゃどうか知らねえが、この国じゃそんな子どもにイタズラしたら、ブタ箱に入れられんだよ？」

そう言いながら、彼は二人の方へ足を進める。その口調は軽いが、目は剣呑な光を含んで油断なく金髪の男に向けられていた。全身から、今にも男の首をねじ切りそうな空気を放っている。

「くっ……！　せつかくの好機を……」

呟いた男の周りで、空気がざわりと蠢いた。長い金髪一本一本が意志を持ったかのようにうねる。

異様な空気に、康平の足が止まった。何だか判らないが、何か起きようとしていることを察する。

密度を増す空気の中で、上体を起こした未明が鋭い声をあげた。

「！　アレイス・カーレン！　この世界に属さない力でこの世界の命を害することは、理を乱すわ！　『求道者』のあんたがそれを是とするの！？」

未明の糾弾に男は忌々しげに顔を歪めたが、異質な気配は速やかに収束していく。

「確かに、私が理を乱すことはできません。残念ですが、今は諦める他ないようですね……」

そう呟くと、一歩退き、指先を複雑に動かした。

「また、近いうちにお逢いしましょう」

そう、未明に笑いかけ　彼は、消えた。

「！？　おい！？」

康平がきよろきよろと上下左右を見回すが、金髪の男の姿はまる

で最初から存在していなかったかのように消え失せていた。

今の現象を映した筈の自分の目が信じられず、康平は未練がましく唯一の逃げ場である空を見上げるが、ビルの壁には足がかりになりそうなものはなく、よじ登ることは到底不可能だろう

「訳が解らねえ……」

ボソリとぼやき、康平はまだ地面に座り込んだままの未明に手を差し出す。立ち上がった彼女に、バサリとジャケットを被せた。

「まったく、何なんだ？ ロリコンかよ？」

康平の言葉が、あの男 アレイス・カーレンがしようとしていたことを指しているのだと察し、未明はこっそり苦笑する。確かにあの状況は、傍目には大の男が子どもを陵辱しようとしているようにしか見えなかっただろう。

「彼は 『悪い奴ら』の一人よ」

「そうか」

康平の返事はそれだけだった。

「説明は、要らないの？」

「必要ねえよ。依頼された期間はお前を守る。それだけだ」

裏を返せば、その期間を過ぎれば後は関係がないということだ。詳しいことなど、聞く必要はない。

康平の依頼人は『ワケあり』の人間が殆どだ。彼らの事情をいちいち知る必要はない。さすがに消えうせる人間など初めて見たが、だからと言って、これまでのスタイルを崩す気はなかった。

康平にとつて、『依頼人』とのつながりは『依頼』だけで充分で、それが切れれば、また『何の関係もない人間』に戻るのだ。

彼には、余計な『つながり』など必要なかった。

四

彼は、なす術もなく、ただ、立ち尽くしていた。

両の眼から滂沱の涙を流す、少女。

彼女に群がる、男たち。

一通りの欲望を吐き出し尽して、やがて彼らは立ち去っていく。残されたのは、打ち捨てられたぼろきれのようになった、少女。

腹は紅く染まり、右脚は　ああ、何ということだろう。

恐らく、彼女は助からず、万が一命を繋ぐことができたとしても、敵の男たちに陵辱され、体中を刻まれ、片足も奪われた少女に、どうしろというのか。

コロシテ。

浅い息の間で、少女の唇が、懇願の言葉を紡ぐ。

彼は、拳銃を取り出した。

決して外すことのない距離で狙いをつける。

彼女が、これ以上苦しむことのないように。

少女が目を閉じる　最期に、彼に一言残し。

彼は、引き金を絞った。

*

「　っ！」

康平は闇の中で大きく目を見開いた。

アナログ時計の秒針が刻む音だけが、彼の鼓膜を震わせる。

じつとりと湿った両手を目の前に持つてくると、灯りがなくても、小刻みに震えているのが見て取れた。まだ、あの感触が残っている。

「……くそっ」

しばらく、見ていなかった夢なのに。

きつと、昏間のあの光景の所為だ。

未明を組み伏せる男の姿を見た時、一瞬、二十年前の光景が脳裏にフラッシュバックした。

忘れられたと思っても、結局、忘れていなかったのだ。

自分が殺し 救った少女。

未明とさして変わらぬ年だった。

自分は、本当に、あの少女を救ったのだろうか？

康平は、カーテンの隙間から白んだ光が入り込んでくるまで、闇を睨み続けていた。

*

「事情を話せ」

康平が朝食の席でそう切り出すと、未明はきょとんと目を見開いた。

「あいつは何なんだ？」

「……説明しても、理解できないよ。このまま、何も知らない方がいい」

「いいから、話せ。理解できるかどうかは、聞いてから判断する」
それでもしばらくは無言だったが、やがて小さな溜息をついて、未明が話し出す。

「この世界でも、お話の中では存在するみたいだけど……私はこことは違う世界から来たのよ。異世界、異次元、そんなところ」

ちらりと未明が康平に視線を走らせる。彼は、無言で顎をしゃくった。

「ここでは『科学』が発達したようだけれども、私が今まで渡ってきた世界では、『魔術』が力を持っているところが殆どだったわ。

この世界でも魔術を習得した者がいたみたいだけど、主流にはならなかったみたいね」

「他にも世界があるのか？」

「あるわよ、たくさん。界を渡れる力を持った者はわずかだから、

こうやって異世界の者と会うことは、滅多にないと思うけど」

「……そうだろうな」

康平だって、今まで物語の中でしか『異世界』などという言葉は耳にしたことがない。実際、昨日の男が現れなかったら、そんなものが実在することなど決して信じなかつただろうし、一生知らずにいただろう。

「私はこれまでたくさんの世界を渡ってきたのだけれど、あの男はアレイス・カーレンは、私が最初にいた……私が生まれた世界からついて回っているのよ」

「なんで、また？ ロリコンってワケじゃないんだろ？」

「少女に性的衝動を覚える性癖のこと？ そうじゃないわ。彼が狙っているのは私の身体そのものではなくて、私の中に眠っているものよ。彼は『求道者』と呼ばれる一派の者で、魔術を極めることのみを求めているの」

「お前の中に眠っているもの？」

「『魔道書』よ。至高の魔道書『グールムアール』」

「『魔道書』……」

まさに、映画の中の話のようだ。もつとも、康平はファンタジー映画など観たこともないが。狐につままれた顔をしている彼には構わず、未明は先を続ける。

「『魔道書』は魔力を補完し増強するものなのだけれども、『グールムアール』はその中でも桁外れのものよ。多分、これ以上のものを創ることは不可能だと思っわ」

「で、それをアイツは欲しがっているのか……。けど、どうやって奪うんだ？」

未明の『中』ということは、『物』として持っているわけではないのだから。

「私が自分の意志で受け渡すか……満月の夜に私と契れば、いいのよ」

淡々とした未明の言葉に、康平の顔が強張る。

「『契る』って……」

「『そういう』意味よ。言っておくけど、私のこの姿は、仮のものよ？ 今は事情があつてこの姿になつていただけなんだから。あなたも会つているのよ、本来の私に。満月の夜に『グールムアール』の効果が最大になつて、次元を跳ぶことができるようになるの。あの日、私は、この世界に着いたばかりだった」

「あ……もしかして」

「そう、『姉』よ」

なるほど、あの姿であれば、頷ける。

「今は界を渡つて間もないから、魔力が回復していないの。でなければ、昨日、あんなふう遅れを取つたりしない。あと数日したら戻ると思うけど……それまで、この部屋に隠れているつもりだったの」

「どこかに閉じこもっていれば見つからないのか？」

「まさか。実は、この部屋、護符で結界を張らしてもらっているの。今の私の魔力なら、ここにいれば感知されることはないわ。いつもは回復するまでこうやって隠れているんだけど……油断したわ。今回は一気に遠くまで跳んだからついて来られないだろうと思つていだし、ついてきたとしても普通は追つ手もそれなりに魔力を使うから、同じように消耗してしばらく追つてこられないのよ。でも、どうやら今回はちょっと特殊な手を使われたらしくって」

「あつちはエネルギー満タンってことか」

「そう」

未明はそう言つて、肩を竦める。

それなりにピンチだと思つのだが、悟っているような未明はさほど深刻そうに見えない。

「で？」

「……で？」

康平の振りに、未明がきよとんと首をかしげる。

「お前のゴールは何なの？」

「……ゴール？」

康平の言っている意味を理解できないでいる未明に、彼はガリガリと頭を掻いた。

「三週間後に、ここを出て行くんだろ？　その後、どうすんの？　ずっと逃げんの？」

未明は、問われて顔を伏せる。

追っ手を倒すことは簡単だが、彼女はそれをしたくない。だから、逃げ続けるしかないのだ。

「お前の中の、その……『魔道書』ってのが問題なんだろ？　それを何とかしたらいいんじゃないの？」

「それは……」

その通りなのだ。追っ手から逃げると同時に、未明は幾つもの界を渡って、ずっと『それ』を探し続けてきた。

「手はあるんだな？」

「……うん。ずっと、探してる　この『グールムアール』を封じることが出来るものを。……『決して壊れることのないもの』を」

「そんなモンが存在するのか？」

形あるものは壊れることが道理だ。康平は半信半疑の表情で尋ねる。

「私の世界の言葉では『普遍のもの』……『ユヌバール』と呼んでいるわ。この世界では、『オリハルコン』、『ヒヒイロカネ』なんて呼ばれているものと同じだと思うのだけど」

「お伽噺の中で聞く言葉だな」

「そうなの？　でも、魔術を学ぶ者にとっては、実在すると言われる。私がこの世界の中でこの国を選んだのは、『ユヌバール』……『ヒヒイロカネ』の伝承があったからなの」

「そのヒ何とかったのは、聞いたことねえな」

康平にしても、『オリハルコン』は割合メジャーだと思うが、『ヒヒイロカネ』は耳慣れない。

「え……でも、存在したっていう文書があって、公的にも認められ

ていたって……」

「トンデモ本が言ってるだけじゃねえの？ この世界は情報過多だからな。特に、そういうオカルト系の話は、ホントもウソも入り乱れてるぜ」

「そんな……」

呟き、未明が肩を落とす。

「まあ、お前がこの世界にいるうちは、俺が面倒見てやるよ。取り敢えず、探すだけ探してみればいいさ。俺たち普通の人間には判らなくても、お前には判ることもあるかもしれないだろう」

「え？」

「乗りかかった船、だ。お前にもらった報酬、かなりあるからな」それは控えめな表現で、鑑定してもらって出てきたのは、一生遊んで暮らせる金額だった。金があるなら、別に働く必要はない。働かなくていいなら、することがない。だったら、しばらくの間はこの少女に付き合ってもいいだろう。

「取り敢えずは、その『ヒロカネ』とやらの信憑性から調べようか」

「……『ヒロカネ』」

ポソリと、未明が康平の言い間違いを正す。

「でも、いいの……？ あんな、変なヤツが追っかけて来るんだよ？」

「まあ、たまにはこういうのもありだろ」

苦笑して、康平は彼女の頭をクシャクシャと掻き回す。

「で、お前の本当の名前はなんていうんだ？ その未明ってのは、ここに来た時に考えた名前なんだろ？ っていうか、なんでそんなに日本語ぺらぺらなんだ？」

「言葉は……あなたが寝ている間に、この世界に関する基本的な知識を吸収させてもらったのよ……あなたから……勝手に、ごめんなさい」

正直に言って、知らない間に何かされていたのは気分が良くない

が、悪戯した猫のように頂垂れている未明に、それ以上ネチネチ何か言つのも気が引ける。康平は肩を竦めて受け流した。

「ま、いいさ。で？ 名前は？」

「ミアカスール……私の世界の言葉で、『希望をもたらすもの』という意味なの」

「それは、また、大仰な名前だな」

「ふふ、そうでしょう？」

茶化すように康平が言つと、未明は微笑んだ。

「名前どおりの力を持つてんだらうけどさ、まあ、ここにいる間は、取り敢えず護つてやるよ」

「え？」

康平の言葉に、未明は大きく瞬きする。

「だから、あんな変態野郎からお前を護つてやるって言つてんの。

ま、『力』とやらが戻りさえすれば、あんなのを撃退するのなんて簡単なんだらうけどな」

「……………」

繰り返されて、未明がうつむきながら、そう囁いた。

戸惑いを隠せないその様子に、こんな子どもなりをして、これまで誰からも護つてもらつたことなどなかったのだらうかと、康平はわずかな苛立ちを覚えた。

五

アレイス・カーレンの襲撃から一週間が経った日。

朝起きてきた未明が康平を手招きした。

「何だ？」

「いいから座って、座って」

リビングのソファに康平を座らせると、部屋の四隅に行き、床に指先で何かを書いた。康平が伸び上がってその場所を見ても、何も無い。

四つの角に全て同じことをし終わると、未明は康平の目の前に戻ってくる。

「黙って見ててね」

そう笑いかけると、未明は両手を組んで目を閉じる。その唇が二言三言、何かを呟いているのが見て取れたが、声までは聞き取れなかった。

それは、ほんのわずかな時間で。

「？」

未明の指先に炎が宿り、ふつと宙に浮く。それはクルクルと舞い、やがて二つ、そして四つに分かれた。

「どう？」

その火の玉を康平の目の前に一列に並ばせると、未明が首を傾げる。康平は思わず火の玉の上下左右に手をかざし、糸がないかと探ってしまった。当然、何も無い。手品だとすれば、天才的な腕前だ。「どうって言われても……」

話で聞き、信じたつもりになっていたが、実際に目の当たりにするとやはり驚きは半端ない。これで、心底から信じないわけにはいなくなつた。異世界や魔法の話を。

「力は完全に戻ったわ。これで、追っ手とも戦える」

そう言うと、未明は手をきゅっと握る。と、同時に、四つの炎も

掻き消えた。

「どういう仕組みなんだか」

「仕組みって言っても……私の世界とこことは、根本的な法則が違
うから……」

「法則？」

「そう。この世界の『物理』というのでも調べてみたけど、さっぱり
解らないわ。同じように、『魔術』を説明しても解らないと思うし、
説明のしようがないの」

そう言う未明に、康平は肩を竦めてみせる。

「物理なんて、あんなもの俺にも説明できねえよ」

「え？でも、学んだんでしょ？」

「俺は学校ってところに行っていないからな」

「あれ、でも、この国は 日本は『義務教育』っていうのがあっ
て、殆どの子どもは『高校』というところに通って勉強するって…

……」

「俺はそのくらいの年の時には、日本にいなかったんだよ」

「『教育』はこの国だけのことなの？」

調べたことと事実が一致せず眉を寄せる未明に、康平は片手を振
る。

「人生色々ある奴もいるんだよ」

それ以上の説明は拒んで、その台詞で康平は話を打ち切る。そん
な彼を未明はジツと見つめたが、諦めたように溜息をついた。

「……まあ、いいわ。これを持っていて」

「……何だ？」

未明に差し出されたものを受け取って、裏表をためつすがめつす
る。それは鎖を通したコインのように見えるが、康平がこれまでに
目にしたどの国のものとも違っていた。金属の光沢とは別に、仄か
な光を帯びている。

「護符よ。一度だけ、あなたに向けられた魔力の大半を無効化する
わ。完全に防御することはできないけれど、護りになる筈よ」

「あれ、でも、魔法でこの世界の人間を害することはできない、とか何とか言っていないかったか？」

「そうだけど……念の為よ」

どこことなく切れが悪い未明の言い方に康平は引っかかりを覚えたが、何ぶんにも未知の領域の話だ。きつと、彼らには彼らなりの法則があるのだろう、と納得する。いずれにせよ、一生のお付き合いと、いうわけではないのだ。深く突っ込む必要はない。

受け取った護符とやらを首にかけ、康平は立ち上がる。

「飯にしようぜ。腹減ったよ」

そう言いながら、キッチンに行き、朝食の準備に取り掛かった。

彼の背中を見送った未明は、ふと疑問を覚える。

康平はしぶんすんなりと自分のことを受け入れているが、この世界の人間はそういうものなのだろうか。

魔術というものに慣れ親しんでいるならともかく、この世界では眉唾な領域として認識されている筈だ。未明は、これほど抵抗なく受け止められるとは思っていないかった。

普通は、現実がひっくり返されるような、とんでもないことではないかと思うのだが。

ある意味、『どうでもいい』の……？

康平からは、あまり『芯』というものを感じられない。柔軟といえば聞こえがいいのだが、全てに関して『投げやり』な気がする。

一方で、アレイスから助けしてくれた時は、怖いほどの気を放っていた。

その二面性は、時折彼から漂ってくる『翳』と関係があるのだろうか。

未明は、図らずも一時頼ることになった相手に関して、いまひとつ人となりを見極めかねていた。

六

朝食が終わると、康平は次の行動を切り出した。

「もう外に出てもいいんだろう？　なら、俺の知ってる古物商のここに行くぜ」

「古物商？」

「そう。いわく付きの物をよく取り扱う奴で、眉唾な話もよく知っている筈だ」

「眉唾……」

彼女にとつては至極重要なことをキワモノ扱いされたためか、未明が複雑な顔をする。

「何変な顔してんだよ？　食い終わったんなら、行くぞ」

康平が促すと、彼女は食器をキッチンに運び、水に浸けた。習慣付いたその行動に、短い間にだいぶこの世界に馴染んできてるよなあ、と感心する。言うなれば、転勤を繰り返している家庭の子どものようなものなのだろうか。

未明の身支度が整うのを待つて、部屋を出る。

古物商は、康平が住む新宿に店を構えている。正確に表現すると、店というよりは事務所かもしれない。雑居ビルの一室が『店』なのだが、店主いわく「研究九割、商売一割」らしい。由来の解らない妖しいモノが所狭しと置かれているのだ。特に看板を出しているわけではないのだが、人伝で情報が伝わり、一部の者の間では有名な人だ。

康平の住んでいるところからはそこそこ距離があるが、歩いて行けないほどではない。特に急ぐ理由もないため、彼は徒歩を選んだ。裏通りなので、先日の買い物時のような人混みはなく、今度は未明もじっくりとこの世界を観察できているようだ。

「この間は人ばかりで何も見えなかつたけど、やっぱり、この世界の『機械』って、スゴイわ」

信号機一つに感心する様子を見るのは、正直言って面白い。

「……ちよつと、何にやにやしてるのよ？」

膨れっ面で見上げてくる顔は、まるきり子どもそのものだ。これが、彼の記憶に臙に残る美女と同一と言われても、さっぱり信憑性がない。

「別にい。何でもねえよ」

少しも『何でも』なくない表情に、未明はより一層、頬を膨らませる。

「いいわ。あなただって、私の本気の魔術を見たらびっくりするに決まってるんだから」

「そりゃ、是非ともお目にかかりたいもんだね」

内心ではそんな羽目には陥りたくないと思いつながら、康平は軽口を返す。「今に見てなさい」とか何とか下の方から聞こえてきて、彼は笑いを噛み殺した。

そんな軽いやり取りをしながら、やがて目当てのビルが見えてくる。

「……ここだぜ」

着いたのは、古臭い、七階建てのビルだ。看板は胡散臭い金融業者や何たら興業など、いかにも真つ当ではなさそうなものばかりが出ている。

消防法に間違いなく引つかかる、ごちゃごちゃと物が置かれた狭く薄暗い階段を上って四階に辿り着くと、表札も何もない扉があった。一応、チャイムを鳴らすが、返事がないのはいつものことで、待つことはせずにそのままドアを開けて中に入る。

「……どなた？」

康平からすればガラクタにしか見えない代物と、古臭い紙の山の向こうから、間の抜けた声がした。

「俺」

「『俺』じゃ判らないよ、康平君。不法侵入で警察呼んじゃうよ？」
「判ってんじゃねえか」

辛うじて床が見えている場所を選んで奥に進むと、唯一の家具と言ってもいいデスクに到着した。その上も書類だか本だかで埋め尽くされている。

「やあ、こんにちは。ご無沙汰だねえ」

少なくとも四十路は越えているだろうこの男は、名を門屋宗助<かどや そうすけ>という。丸メガネにぼさぼさの髪を後ろで一つにくくっており、覇気の欠片も感じられない。

「今日はどうしたの？ 後ろの彼女は誰？」

未明は康平の陰に隠れて見えない筈だが、門屋はケロリとそう言った。こんな物騒な雑居ビルで、戸に鍵もかけずに平然と過ごせる男だけのことはある。

康平は、背後にいた未明を前に押し出した。

「こいつは、未明。俺の今の依頼人だ」

「依頼人？ こんなお嬢さんが？」

門屋はそう言っでずり落ちてきていたメガネを押し上げ、しげしげと彼女を見つめる。

「へえ……」

メガネの奥の糸のように細い目が、ジッと未明に注がれ、居心地が悪そうに彼女が身じろぎする。

「面白いねえ」

ポソリと呟いた言葉は、どんな意味だったのか。

門屋はニツコリと笑うと、康平に視線を戻した。

「で、どんな用？」

「ああ、おたく、アヤシイ骨董品なんかの研究をしてるんだろ？」

「アヤシクなんかはないよ」

鼻息を荒くする門屋は無視して、康平は続ける。

「ヒ……何だっけ？」

「ヒヒイロカネ」

「そう、ヒヒイロカネって、聞いたことないか？」

未明に正されながら康平がそう訊くと、門屋が目を丸くして彼を

見上げた。

「君がそんなものに興味を持つなんて、どうしちゃったの？」

「どうでもいいから、教えてくれよ」

「まあ、そりゃ、知ってるよ。伝説の鉱物の一つだよ。赤く輝く金属で、磁石にくっつかないんだって。そう聞くと、銅っぽいけどなあ。大昔にその製法は失われてしまったと言われているけど、結局は『鉄』なんじゃないかって。一説によれば、餅鉄っていう磁鉄鉱の一つのことだとも言われている。餅鉄っていうのは、普通の砂鉄よりも純度が高くってね。より強い鉄ができるから、精錬技術が未発達だった時代には、いい刀の原料として魔法の代物のように扱われたかもね。まあ、それを製鉄した後、一工夫したらヒヒロカネになるとかならないとか。西洋のオリハルコンと同じだっていう説もあるけど、あつちは銅系らしいしねえ。ああ、そうそう。かの有名な草薙の剣。天叢雲剣はヒヒロカネでできているという人もいたなあ。ホンモノだったら、是非とも欲しいよね」

うつとりと、涎を垂らさんばかりに中空を見る門屋を、康平は気色悪そうに見やった。

「それじゃ、結局のところ、『伝説の鉱物』でもなんでもないんじゃないの？」

「まあ、そうだね。でも、そんなもんでしょ？ 当時によれば、優れた鉄剣は魔剣とか神剣とか呼ばれても不思議はないでしょうし。

二千年前にチタンでも持っていたら、それこそ『伝説の金属』になるよ、きつと。剣を作ったら、『軽くて強くて錆びない』、まさに魔法のような代物だね。要は『浪漫』ですから。謎が謎のままでも浪漫、謎を解くこともまた、浪漫、てね。ま、気になるなら岩手でも行ってみれば？ 餅鉄の産地としては、一番岩手が有名だよ」

観光にでも誘うかのように軽く言われ、康平は未明を見下ろした。「どうする？ 他に取っ掛かりもないし、取り敢えず行ってみるか？」

「ん……何も無いよりは、いいかもね」

どうせ確かなものなど何も無い。ならば、微かな繋がりから探っていくしかないだろう。

ゼロではないだけマシだ。

「ありがとよ。また、何か思いついたら教えてくれよ」

「そっちも、何か判ったら、教えてちょうだいな。報酬は、調査結果という事で」

「安い報酬だな」

「僕にとつたら、何よりも大事なものだよ、情報は」

そう言いながら、門屋はデスクの向こう側からヒラヒラと振ってくる。

「じゃあね、気を付けて行ってらっしゃい」

それは、単なる旅へと送り出すものに対する社交辞令なのだろう。だが、康平には、何か含みがあるように感じられて仕方がなかった。

七

新幹線の車窓から、未明はただあんぐりと口を開いて外を眺めるだけだった。

在来線に乗ったときも興奮を隠し切れないようだったが、新幹線は更に驚きの境地に至ったようだ。

大宮で新幹線に乗り換え、走り出してからすでに三十分は経っている。だが、未明の視線は窓の外に釘付けだった。

三歳児でも見せないその驚嘆ぶりに、康平は満足感を覚える。

飛行機乗せてやったら、どうなるんだろう。

実に楽しみだ。

更に三十分程が経過した頃、仙台駅に停車すると、ようやく未明が言葉を発した。

「……本当に、凄い。いつたい、どんな仕組みになっているの？
こんなに長い間、こんな速度で動けるなんて……」

どうやら、速度が落ちないことにも驚いているようだ。

「仕組みなんか俺にも解らねえよ。……よく乗ってるけどな」

恐らく、日本人の大半が同じ考え方だろう。だが、康平は、未明から信じ難い者を見る目を向けられる。

「何も知らなくて、こんな恐ろしいモノによく身を任せていられるわね……」

「大丈夫だつて、安全だから。偉い人がちゃんと考えてんだよ」

事故つたら、その時はその時だろ、とは、思っただけでも口には出さない。

「ほら、また発車するぞ。次で降りるからな。後一時間くらいで着くから」

『田舎者』の相手をするのも面倒くさく、康平は適当にあしらっておく。彼の狙い通り、未明はどうしても窓の外に目が行ってしまうようだ。

静かになって、康平はやれやれと目を閉じる。

平日早朝の下り新幹線は空いており、人の気配は乏しい。

微かな振動が心地良く、康平はいつしか浅い眠りに落ちていった。それは、短い時間だった筈だ。

ふつと目を開けると、眉を寄せた未明の顔が近くにあつて、ぎよつとする。

「！ 何だよ？」

康平は咄嗟に身を引いてそう訊いたが、彼女は口を噤んでいる。

「おい？」

もう一度、訊く。

すると、やや迷った様子を見せた後で、未明はポソリと言った。

「あなたは、よくうなされてる」

「俺が？」

「そう。夜とか、寢室の前を通つた時に、聞こえてくることがあるわ」

自分では、気付いていなかった。

何故……いつからだろう。

そう自問して、すぐに答えは出た。

目の前のこの『少女』の所為だ。未明が悪いわけではない。だが、彼女の存在が、康平の中の触れて欲しくないものを刺激しているのだ。

「……気のせいだろ」

ムスツとそう答えると、何か言いたそうな顔をしながらも、未明はそれ以上追及してこなかった。

それきり、二人の間には沈黙が横たわり、新幹線が盛岡駅で停車するまで、どちらも口を開かなかった。

再び在来線に乗り換え、電車に揺られること二時間。ようやく、釜石市に到着する。

駅前に取ったビジネスホテルの部屋は、ツインルームだった

外見年齢十歳の未明を一人で泊めるわけには行かないし、何よりも

襲撃者に備えてのことだ。新幹線の中でのことがあって、康平の中には部屋を分けようかという考えがよぎる。しかし、別々に夜を過ごすのはリスクが大き過ぎた。彼の中の問題よりも未明の問題の方が大きく、どういう選択をすべきかは、自明の理だった。

康平は溜息をついてルームキーを受け取ると、エレベーターに向かう。

「行くぞ」

さっさと歩き出した康平を、未明が小走りで追いかける。

エレベーターの中は二人だけだ。

康平はちらりと未明を見下ろし、ようやく聞き取れるほどの声で言った。

「すまなかったな。お前の所為じゃない」

「え？」

唐突な謝罪に、未明がきょとんと彼を見上げる。康平は言ってしまったから後悔の念がよぎったが、出してしまったからには、仕方がない。

「新幹線の中でのこと。別に、お前のことがわらずらわしいわけじゃない」

「……そう」

康平の言葉に、ホツとしたように未明の口元が緩む。やっぱり気にさせていたか、とは思ったが、彼は、それ以上の言葉は持っていなかった。

「またうなされてたら、起こしてあげるわ」

「……そうだな」

あっさりとした未明の言葉に、何となく気分も軽くなったような気がした。

早朝に新宿を出発したため、まだ昼前だ。

ホテルで訊くと、鉾山があつた町まで電車で二十分ほどの距離だとのことで、康平と未明は取り敢えず行ってみることにした。

降りた駅はかつて鉾物の積み出しのために設置されたものだが、二十世紀末に閉山してからはすっかり廃れてきているらしく、無人駅だつた。駅前の通りはシャッターの閉まつた店が殆どで、人の姿もない。

ふと見下ろすと、未明が硬い顔をしている。

「どうした？」

「え……あ、いえ、なんでもないの……」

それが『なんでもない』顔か、と思いつつ、彼女に教える気がないなら仕方がないので、康平もそれ以上は突っ込まない。

「ちよつと歩けば鉾山跡に行けるみたいだぞ。行ってみるか？」

「そうね、見てみたい」

康平は頷くと、駅で買った地図を取り出し、道を確認しながら歩き出す。と言つても、実際には駅前の通りを右と左のどちらに進むか、くらいしかない。そもそも鉾山のために作られた駅なので、そこに到着するのは簡単なことだつた。

打ち捨てられた建造物はたつた数十年の間にすっかり廃墟と化している。敷地内には雑草が生い茂り、窓ガラスは全て板に張り替えられていた。

関係者以外立ち入り禁止の看板は出ているが、見張っている者もなく、康平と未明は奥へと進んでみた。

山の方へ行くと、あちらこちらが抉り取られており、土肌が剥き出しになっている。

かなり進んだ頃、それは現れた。

「あれ、坑道かな」

康平は呟くが、普通、廃坑となったら侵入できないように塞いでしまうのではないだろうか。だが、その隧道はポカリと口を開けている。当然、照明などついていないので中は真っ暗なのだが、それとは別に、何か不穏な冥さが漂っている

「入ってみるか？」

そう未明に問いかけると、彼女は少しためらった後、何かを確かめるように彼の胸元をちらりと見てから、頷いた。

「……行ってみたい。でも　あなたはここで待っていて、と言ったら、ダメ？」

「……はあ？　何言ってるの？」

あまりに突拍子もない未明の言葉に、康平は呆れた眼差しを返す。「やっぱり、そういう返事よね……。わかったわ、行こう」

そう言って、康平の袖を握る。

妙なことを言うわりに暗いところが怖いのか、と思ったが、そうではないようだ。怯えている、というよりも、緊張しているように見える。

この少女が理解不能なことは今更なので、康平は軽く肩を竦めると、バックパックの中からマグライトを取り出した。その頑丈さから武器代わりにもなる優れものである。カチカチと何度か点灯させてから、隧道の中に足を踏み入れた。

中は意外なほどに広く、天井までの高さは三メートルほどありそうだ。中は何の補強もされておらず、どうやら坑道ではなく自然のものようであった。

緩やかなカーブを進むうちに入り口からの光は徐々に届かなくなる。やがて、手元の灯りのみが頼りになった。

その暗さの所為か空気が密度を増したような気がして、康平は、一瞬、眩暈のようなものを覚える。と同時に未明の手に力が入り、微かに袖が引かれた。

「どうした？」

「信じられないかもしれないけれど……」

「え？」

「ここ、少し次元がずれてるの」

「はあ？」

間が抜けた反応をする康平の隣で、未明が身体を強張らせている。

「イヤな感じがするわ」

「あの金髪野郎が来るのか？」

「そうじゃない……もっと、イヤな感じ」

未明の目は、隧道の奥へと注がれている。

「どうする？ 先に進むか？」

「ええ。行かないと」

その眼差しは、強い決意を秘めている。

自分には持ち得ないその強さからふと目を逸らし、康平は先に立つて歩き始めた。

奥に進むほど、空気は重く、暗くなっていく。それは、『光源がない』というだけでは説明できない何かを孕んでいた。これ以上進んではいけないと、康平の本能が警告を発する。一人きりなら、康平はすぐにでも踵を返していただろう。だが、隣を歩く未明は、一歩も退く気配がなかった。

どれほど進んだ頃か、やがて前方が仄かに光を帯びていることに気付く。

「何だ、あれ……」

光と言っても、安堵を抱かせるものではない。むしろ、どこか不安を掻き立てられる。だが、未明の足は止まらなかった。

辿り着いたのは、行き止まりである。少なくとも、康平にはそう見えた。だが、目の前にあるのはただの岩壁の筈なのに、妙に居心地が悪い。それに、光源など何もないというのに、何故か未明の顔立ちまでハッキリと見て取れるほどの明るさがあった。尋常でないことは、特殊な感覚を持っていない康平にも嫌でも理解できた。

一人だったなら、さっさと出て行くぞ、こんなところ。

内心でボヤきながら隣を見下ろすと、彼が見たのと同じ壁を、未

明は食い入るように見つめていた。

不可思議な領域が日常である彼女には、自分には見えない何かが見えているのだろうか。

そんな康平の視線に気付いたように、視線は前に据えたまま、未明が口を開く。

「あなたも感じてはいるのね？ でも、見えてはいない」

「お前には、何が見えているんだ？」

「……ヒトが見るべきではないものよ」

「俺にも見られるようにできるか？」

康平の言葉に、未明は首を振る。

「今なら、まだ『あなたの』現実のままにいられるわ。でも、『アレ』を見てしまったら、全てが変わってしまうかもしれない」

それでも、見たいの？

言外に、未明が問い掛けてくる。

「いったい、彼女には何が見えているというのか。」

少なくとも、世界をバラ色にしてくれるものではないようだ。

『こちら側』に留まるか、『あちら側』に足を踏み入れるかの選択を委ねられ、康平は逡巡する。

未明が見せようとしているものは、間違いなく、康平を今の現実から引き剥がすものだろう。そして、彼女は見せるべきではないと考えている。だが、その『現実』とやらは、果たしてしがみついているだけの価値があるものだろうか。

この少女にとって、この世界にいる『あちら側』の者は、敵だけである。どうせ彼女は、いつかは去っていく者だ。ここにいる間だけでも、助けてやると言ってしまった限りは、同じものを見て、同じ感覚を共有してやるべきなのだろう。

「いいよ、見せてくれよ」

「本当に？」

「ああ。くだい」

そう言われても、まだ未明は迷っているようだった。しかし、キ

ユツと唇を引き結ぶと、覚悟を決めたように康平を見上げる。

「少し屈んでくれる？」

言われるがままに康平が腰を落とすと、スイ、と彼女が手を伸ばした。

「目を閉じて」

指示に従った康平の眼瞼に、細く柔らかな指先が触れる。未明がいつものように、いわゆる『呪文』なのだろうと思われる詞を謳うように口ずさんだ。と、次第にその指先が温かくなっていく。

「……いいよ。目を開けて」

そう言われるが、目の奥がチカチカして開けようとする眩暈がする。何度か強く瞬きをして、ようやくうつすらと開くことができるようになった。

が。

「ッ！！」

康平は、ぼやける視界に飛び込んできたものに叫び声をあげずにいるのが精一杯だった。

岩の壁だと思っていたところには亀裂が入り、その奥で何かが蠢いている。それは、毛皮を持つ『何か』だ。だが、何モノだとしても、その大きさは計り知れない。亀裂一杯に、褐色とも黒色ともつかない、どこかぬめついた暗色の毛皮の壁がゆるゆるとのたうっているのだ。そして、亀裂からは、なんともおぞましい気配が、濃い霧のように滲み出してきている。

「アレは、何だ？ お前は、アレが何か知っているのか……？ お前の世界には、あんなものがあるのか？」

康平は、自分の声が上がらないのを抑えることはできなかった。亀裂を押し破って、得体の知れないあの化け物が今にも這い出てきそうな気がする。

「アレは 『地に棲まうもの』 ガンド。でも、大丈夫。あそこそこことは次元が違うから ……！」

言いかけ、唐突に、未明が康平を引きずり倒す。

不意を突かれて危うく彼女を下敷きにするところを、辛うじて抱き止め、横に転がった。

「何」

するんだよ、そう続けようとして、康平は言葉を失う。なんとすれば、今二人がいたその場所を、一抱えもある火球が飛び過ぎて行ったからだ。火球は隧道の壁を抉り取って消え失せる。

未明を腕の中に包んで地面に転がったままの康平を、二発目の火球が襲った。

咄嗟に未明を小脇に抱えると、横に跳ぶ。

だが、三発目。それは康平が跳んだ先を狙うように向けられていた。

当たる！

康平は全身で未明を覆い隠そうとしたが、その意に反し、彼女は康平の脇から片手を突き出してしまふ。

「バカ！」

思わず怒鳴ったが、未明の微かな呟き声が耳に届く。

迫っていた火球は、未明の手のひらの先　二人まであと十センチ、というところで一瞬にして消え失せた。音も立てず、煙一つ残さずに。

「な……んだ……」

安堵の息が康平の口から漏れてしまふ。多分、この手のことに関しては、この少女はほぼ無敵なのだ。きっと、彼が庇う必要など、全くないに違いない。

腕を解き、未明を解放する。彼女は身体を起こすと、暗がりへと火球が飛んできた方向へと目を凝らした。

八（後書き）

元々一章のものを切ったので、ちょっと中途半端かもです。

九

「やはり、魔術では敵わないな」

その言葉と共に暗闇の奥から姿を現したのは、黒尽くめの巨漢だった。背丈は一八〇センチ強の康平よりも、かなり高く、恐らく、二メートルはあるだろう。体つきもがっしりとして、優男だったアレイスとは何もかも正反対だ。髪も目も黒く、肌の色も濃い。長いマントも黒だった。

「ちよつと、不意打ちなんて卑怯なんじゃないの？ キンベル・ゲダス。……いつものことだけど」

「そうでもしないと、お前には到底勝てまいよ。自尊心よりも、勝利の方が大事だ」

充分な距離を置いたまま、未明がキンベルと呼んだ男は立ち止まった。背丈は二倍、体重に至っては三倍以上はあろうかという相手に向かつて、未明は昂然と顎を上げる。

「ここは何なのよ。元々あったの？ それとも、あんたが何かしたの？」

「いや……。俺は何もしていない。この世界は面白いな。全くといっていいほど魔術とは縁がないのに、こうやって我が神を垣間見ることが出来る場所は、幾つもある」

そう言つと、キンベルは未明を通り越して亀裂の方へと陶然とした眼差しを投げた。どうやら、あの奥でのたうつモノを『神』と呼んでいるらしいが、康平には、とてもそうは思えない。何処からどう見ても、単なる『化け物』だろう。

しばらくうつとりと眺めた後、キンベルは亀裂から未明へと視線を戻した。

「さて、俺も訊きたいな。何故、お前はここにいる？ まあ、いつも雲隠れしてなかなか姿を見せないお前がこうやって俺の目の前に出てきてくれたのは、ありがたいことだがな」

「別に、あなたの為にこんなところまで来たわけじゃないわ」

「それでもいいさ。丁度いい。我が神の為に、その命を捧げさせてもらおう」

そう言うと、キンベルは背中に手を回すと、スラリと何かを抜き取った。

「ちよつと、待て。あんなもの持ってきてやがんのかよ」

康平と未明の目の前で、キンベルは未明の身長ほどもある肉厚な両刃の剣をゆつたりと構える。

「大体、殺す気満々つてのは何なんだよ。話が違うだろ？ 後で説明してもらってからな」

「康平、私が……」

「いいから、隠れとけ」

康平はキンベルに目を据えたまま未明にそう言いおくと、腰の後ろに挿しておいたコンバットナイフを鞘から取り出す。カーボンステール製で、刃渡り二十センチ以上なのに重さは五百グラム無く、強度も優れている。相手は長物だが、懐に入り込んでしまえば、むしろこちらに有利だ。

キンベルの長剣に比べれば玩具のように見える得物を持って近づく康平を、彼は大きな身体を揺するようにして嘲笑する。

「お前は何者だ？ ミアカスールが人と共にいるなど、珍しいな。

そんなもので向かってくるとは、いい度胸だ」

「刃物と何とかは使いようなんだよ。バカにしてると痛い目見るぜ？」

康平は、ネコ科の猛獣のようなゆつたりとした歩みで無造作にキンベルに近づいていく。しかし、その目は大男の全身を隈なく探っており、わずかな筋肉の動きも見落とすつもりはなかった。

彼の動きに、キンベルの目に緊張が走る。

「……少しは、できるようだな」

「判っていたただけだ？」

軽口を返しながらも、両者の眼差しに油断はない。

康平が、キンベルの剣の間合いの一步手前を保つ程度の距離で、円を描くように動く。滑らかな足運びは、小さな音一つ立てない。両者ともに踏み込むタイミングを探る。

先に動いたのは、互いの隙を窺うのに焦れたキンベルだった。空気を震わす気合と共に剣を振り上げて康平めがけて突進する。

「でやあッ！」

渾身の力で振り下ろされたその刃は、当たれば人の身体など真っ二つにできるだろう。だが、康平はナイフのバックでそれを受け、キンベルの力のままに流していく。多々良を踏んだキンベルだったが、力任せに剣をVの字を描くように下から上へと切り上げた。わずかに、康平の髪が削がれるが、それだけだ。

懐に入り込んだ康平がナイフを水平に薙ぐと、キンベルの長衣の胸元がぱくりと口を開ける。挨拶代わりにそれだけすると、康平は再びトトツと後ろへ下がる。

「貴様……！」

キンベルは続けざまに康平に向けて剣を振り下ろす。

子ども一人分ほどの重さはあるだろう大剣を、キンベルは上下左右に軽々と操った。が、康平は踊るような足取りで全て紙一重でかわしていく。

「おっさん、魔法は使わねえの？」

再び距離を取って、康平は茶化す。未明を見ていて、魔法を使うには『呪文』が必要なことは判っていた。多分、キンベルにはそれを口にするだけの余裕がないのだ。

案の定、キンベルの顎がギリ、と音を立てる。

大剣が唸りをあげて横薙ぎに振り抜かれる。康平はトン、とそれを一步のバックステップでかわすと、その反動で前に跳ぶ。一気にキンベルの懐に入ると、回し蹴りで彼の側頭部を薙ぎ倒した。

頭蓋骨への強打で脳を揺さぶられ巨体が思わず膝を突く。

「違う世界から来た人間と言っても、見てくれが同じなら急所も同じなんだな。どうした、平和ボケした世界の住人に油断したか？」

未だ立ち上がれずにいるキンベルは、顔を伏せたまま、康平の押
揃にも応えない。膝を突いたまま意識を失ったのかと半歩近付いた
康平は、ふと、彼から漏れ聞こえる微かな呟きに気付く。
と、焦りを含んだ未明の警告が洞穴に響く。

「いけない！ 康平、下がって！」

利き足を前に踏み出した格好の康平は、未明の声に反応はしたが
行動は遅れる。

未明の声と同時にキンベルが顔を上げ、ニヤリと嗤った。そこに
あるのは勝利の確信。

「喰らえ！」

突き出した彼の片手から、至近距離で火球が放たれる。

「！」

思わず意味もなく腕を上げ、顔を庇う康平。

そんなことで、岩壁を抉るほどの代物を防げるわけもない。
だが。

身構えた康平を、熱も衝撃も襲うことはなかった。

火球が彼に触れようとした寸前、彼の胸元が熱を帯び、瞬時に目
の前に輝く壁が出現する。それは火球が衝突すると同時に一際強い
光を放ち、両者が互いを吸収したように消え失せた。

「ミアカスールの護符か……」

一瞬呆気にとられた康平だが、忌々しげなキンベルの毒づきに我
に返る。

「よくよく、不意打ちの好きなおっさんだな」

一種感心したような声で言う康平の前で、キンベルはゆっくりと
立ち上がり、後ずさる。

「今回は準備不足だ。せつかくの機会は惜しいが、また出直させて
もらおう」

そう言つと、以前の金髪の優男と同様に姿を消した。

静寂を取り戻した隧道の中、パタパタと未明が康平に駆け寄る。

「康平！ 大丈夫？ 怪我はない？」

彼の周りをグルリと回って上から下まで眺めつくす未明に、康平は苦笑する。

「そんなに見たって、かすり傷一つねえよ。こいつ、すげえな」
傷を作らずに済んだ理由の最も大きなものは、未明の護符だ。胸元から鎖を引っ張って取り出すと、もらった時には輝いていたそれは、うつすらと黒ずんでいた。

「もう一度、魔力を入れておかないと。家に帰ったら、渡してね」
康平の無事を確認して安堵した未明は、彼にそう言っておいて、再び亀裂へと向かう。

岩壁　亀裂に、今にも触れんばかりに近づくと未明に、あんな禍々しい空気を放っている場所に近づいて、おかしくならないのだからかと康平は不安になった。自分だったら、三メートル以内に近づいたら発狂しそうだし　その自信がある。

だが、未明は指先が触れそうなほどに両手を前に突き出し、泰然と佇んでいる。

何度かの深呼吸で大きく肩を動かしたが、ピタリと止まると彼女の柔らかな声が洞穴に響き始めた。それはキンベルとの戦いと、異形のものへのおぞましさでささくれ立った康平の心を鎮めていく。

やがて未明の身体が光を帯び、徐々に強まっていく。洞穴の不自然な明るさが未明の放つ光に圧倒され始め、それと共に、まるで映像を巻き戻しているかのように亀裂が次第に修復されていく。

亀裂がわずかな隙間を残すのみとなった時、そこから、濁った金色に縦長をした暗黒の瞳孔を持ったものがぎよろりと覗いたが、未明が一際強い光を放つと同時に、その隙間すら消失する。

未明の身体が放つ光が掻き消えると同時に、辺りは本来の闇に包まれた。

と、トサリ、と、柔らかなものが落ちる音だけが康平の耳に届く。
「……………未明？」

声を掛けても返事がない。

康平はマグライトを再び取り出すと、未明が立っていた辺りを照

らす。そこに姿はなく、少し下げたところ、地面の上に、彼女は崩れ落ちていた。

「未明!？」

駆け寄って、頬に触れる。ライトに照らされた顔色は蒼褪めていたが、肌は温かく、首筋にはしつかりとした脈が感じられた。

小さく息を吐き、康平は空いている腕に彼女の身体を抱き上げる。小さな頭がくたりと肩にもたれてきて、微かな吐息が彼の頬をくすぐった。

マグライトを肩の高さで固定したまま、周囲をグルリと照らしてみる。そこは、もう、ただの隧道の行き止まりだった。おぞましさも、不安も、掻き立てられることはない。

「まったく。わけの解らんことに足を突っ込んじまったな……」
呟いて、康平は闇の中を歩き出す。

これまでの常識を覆す敵に、正体不明の化け物。

あの亀裂を目にした時、感じたのは本能に訴える、生理的なおぞましさだった。だが、それは、裏を返せば単なる感覚に過ぎない。

康平は、もっと明確なおぞましさを知っている。それに比べれば、あんな根拠のないものなど、取るに足らない。

彼にとって、この件から手を引くほどの衝撃とはなり得なかった。

目を開けると、未明の視界には、白く四角い天井が入ってきた。寝かされているベッドのヘッドボードには小さなランプが点いていて、それだけがほのかな明るさを保っている。

『この状況に至るまで』を辿るのに、若干の間を必要とする。

ああ、そうだ。『アレ』が……。

久方ぶりに間近で感じた、あの気配　あのおぞましさ。

わずかな隙間から覗いただけだというのに、未明の記憶の奥底に眠る恐怖を揺さぶった。かつて、彼女の故郷では、あの姿を視界に入れただけで発狂したものが数多くいたものだった。

そういえば、と、未明は首を巡らせる。

すぐにその姿は見つかった。

未明が寝かされているベッドと出口の両方に目が届くように置かれた椅子に、康平は腕を組んで座り、顔を伏せていた。眠っているようで、ピクリとも動かない。

未明は、しばらく彼の姿を見つめた。

何故、自分は、彼に『アレ』を見せてしまったのだろうか、と、自問する。

『アレ』を見てしまえば、康平は彼自身の『現実』には帰れなくなってしまうかもしれないのに　彼を、『彼自身の世界』から引き剥がす権利など自分にはない筈なのに。

何故、彼の優しさに甘えてしまったのだろうか。

そう問いかけて、未明は自嘲の笑みを浮かべた。

答えなど、自ずと知れる　寂しかったからだ。

事実のほんの一部を話した時に「護つてやる」と言われ、嬉しいと思ってしまうた。自分が背負っている重荷を分かち合ってくれるのではないかと、期待した　隠してあることの方が遙かに多かったくせに、康平にそう言われ、罪悪感よりも喜びを強く感じてしま

「……まるで別れ話だな」

「茶化さないで。これ以上は、もう、本当にダメ。『アレ』だって、見せるべきじゃなかった」

「『見せる』と言ったのは、俺だ。俺が訊きたいのは、まさにその『アレ』とやらのことだ。あとは、あの大男だな」

キンベルのことだけならば話してもいいかもしれないが、彼のことを説明するには、必然的に『アレ』についても言及しなければいけなくなる。

押し黙る未明に、康平が痺れを切らす。

「いいか？ 満月になったらお前を犯ろうと待ち構えている奴を相手にするのは、会うなり殺ろうとする奴を相手にするのは、大違いだぞ？」

未明が手を振り払おうとしたのを感じたのか、康平の手にわずかに力がこもる。それは、痛みを与えずにいるギリギリの力加減だ。

「放して。もう、いいの。もう、力も戻ったし、護ってもらう必要は、本当はないの。いつも独りでやってきたんだから、また独りでやるわ」

「本当に、そうしたいのか？ 独り『で』いいのと、独り『が』いいのとは、全然違うぞ？ お前が、本当に独りがいいというのなら、俺はこの手を放す。どっちだ？」

答えようとして、未明の唇が震える。

言わなければいけない言葉は判っていた。けれども、それは心を裏切る答えだ。

未明は少し間を置いて、口を開いた。

「私は独りがいいの。あなたは、もういらない」

はつきりとそう言い切る。これで、康平も手を放すだろう、そう思った。

だが、彼は呆れたような顔になる。

「ばあか。そんな顔して言われたって、『そうですか』って放せるかよ」

そして、取られた腕を引っ張られ、未明は康平の胸に額をぶつける。

ギョツと抱き締められ、ガシガシと頭を撫でられた。それは、まるできり幼い子どもに対する所作だったが、何故かとても心地良く、彼女は身動き一つできなかった。

「あんな、俺は昔、お前ぐらいの女の子を殺したんだ。……あれ以来、二度と女子どもは見捨てないって、決めてんだよ。基本的に色んなことがどうでもいいが、それだけは決めてる。それで昔の俺が赦されるなんざ、これっばかしも思っちゃんねえ。単なる自己満足って事も解ってる。でも、俺は、そう決めてんだ。だから、實際のところは、『お前のため』なんかじゃないんだ。……まあ、お前が、人殺しなんかと一緒ににはいられねえってんなら、仕方ないけどな」

自嘲するような康平の最後の呟きに、未明は彼の腕の中で勢いよく頭を振る。

グリグリと胸元を擦られ、彼は息を吐き出すように笑いをこぼした。

「少なくとも俺の手が届く範囲だけでも、護らせてくれよ」

「でも……」

「俺がどうなるか、じゃない。お前がどうして欲しいか、で決めろ」

「……」

この世界の者ですらない自分が、この世界の住人の運命を左右するようなことを望んでいいものなのだろうか。

白紙委任状を渡されても、未明はまだ迷う。

けれども、もしも望んでもいいのなら……。

「私……まだ、一緒にいたい。もう、独りは、いや……」

囁きのような声が、確かに康平の耳に届く。

お互いに、相手は誰でも良かった筈だ。護る相手も、すぐる相手も。

しかし、数多い人間の中で、切実に望む者同士が出会ったのな

らば、それは何か意味があることなのかもしれない。そう、未明は信じたかった。

「じゃ、話してもらおうか」

改めて、康平が未明に迫った。

場所を移して、二人は互いのベッドに向かい合って腰掛けている。

「うん……」

頷きはしたが、そこから先になかなか進まない。だが、話す気はありそうだと、康平は急かさずに待つこととする。

やがて、未明は大きく息を吸い、顔を上げた。

「私が生まれた世界は、アンサムというの。この世界から、ずっとずっと、『遠い』世界。アンサムはことは正反対で、機械とかは全然なくて、全てが魔術で動いていたわ。何度も何度も次元を跳び越えて界を渡ったから、きつと、もう帰れない。どうやったら帰れるか、判らないの」

彼女の目にあるのは、郷愁の色　そして、諦めの色。

「アンサムは魔術の世界　そして、『旧き神々』に支配された世界だった」

「『旧き神々』？」

「そう。この世界の神とは違う。この世界の神は、人が、信仰の対象として創ったものでしょう？　人があって、神がある。アンサムの『旧き神々』は、何というか、ただ、ひたすら強大な力を持った存在、だわ。アンサムでは、人は神の餌だった」

不穏な言葉に、康平は眉をひそめる。その顔に気付いて、未明は力なく笑った。

「『餌』……そう、『餌』だったの。『旧き神々』は、私が生まれる遙か昔に、他の次元からアンサムにやってきたのだと聞かされていたわ。『地に棲まうもの』ガンド、『水に棲まうもの』オスラム、『空に棲まうもの』シーカイ。この三神に、それぞれが産み出した眷属たち。三神たちは人々の生気を搾取し、眷属たちは実際に人を

襲ってきたわ。人は、ただ、滅びないことだけに必死だった」

果たして、それを『神』と言つてもいいのだろうか。信仰というものに興味を持たない康平には解らなかったが、あまりにも一方的過ぎる関係のような気がした。彼の疑問をよそに、未明が嘯み締めるように続ける。

「人は、何とか、『旧き神々』に対抗する手段を探したわ。そして、その方法は　理論は、見つかった。それは、どの次元にも属さない場所　次元の狭間に封じ込めるというものだったの。次元を切り開き、その狭間に三神を押し込め、穴を塞いで封印する。封印のための『鍵』として作り出されたのが、私の中にある魔道書『ゲールムアール』よ。三神さえ封じてしまえば、眷属はどうにでもなるとにかく、三神をどうにかしなければならなかった。でも、理論は完成し、何人もの術者の命を使つて最強の魔道書まで作り上げたのに、あと一歩が足りなかった。『ゲールムアール』が強力過ぎて、誰も使えなかったの……長い間」

「それ……」
「そう」

未明はその容姿にそぐわない大人びた笑みを浮かべて、両手で自分の胸を指し示す。

「私の名前はミアカスール　『希望をもたらすもの』」

その『希望』は、アンサムに住む殆ど全ての人のものだった。

「私が産まれた時、誰もが喜んだ。私の身体はまったく魔力を帯びておらず、それゆえに、どんな魔力も受け入れることができるの。」

だから、『ゲールムアール』もこの身に宿すことができたのよ。ごくごく稀に、私のようなのが産まれることがあるらしいわ……普通は、アンサムでは魔力が高い者ほど優れているとされるのだけど」

「選ぶことはできなかったのか？」

「選ぶ？」

「その何とかつてヤツを受け入れるかどうかを、さ」

「そうね、選んだわ　受け入れることを」

「何でだ？」

「？ だって、それが私のできることだったから」

そう言った未明の眼差しには、一片の迷いもない。

だが、康平には、未明がその特異体質だということ、周囲が無言で圧力をかけ、そうせざるを得ない状況に追いやったのではないのかという疑問が拭えなかった。

そんな彼の顔色を読み取ったのか、未明が小さく笑みを漏らす。

「『肉親の情』という鎖を作らないように、私は両親から離され、魔道師たちの間で公平に育てられたわ。親しい人を守ることが私の行動の理由にならないように。私が、私自身の意志で決められるように。彼らは、『ゲールムアール』を宿すことで何が起きるか、全て話してくれて、その上で、どうするかを選べと言った。そして、私は選んだ。自分の命と他の大勢の命を天秤にかけたわけでもない。自己犠牲のつもりもなかった。ただ、どうすることが一番正しい道なのかを考え、選んだの。これは私の 私だけの意志よ。」

その堅固さは、まるで難攻不落な砦のようだ。

自分がかつて戦いの中に身を置いていたとき、これほどの信念を持っていただろうか。自問した康平は、それに自嘲の笑みを浮かべるしかない。彼は、未明の信念の百分の一ほども、確たるものを持つてはいなかった。康平こそが、刷り込まれた思想で踊った愚か者だった。

康平の思いをよそに、未明は過去語りを続ける。

「多くの犠牲を必要としたけれど、私たちは『旧き神々』を封じることに成功し、私はその鍵となった。私が 私の中の『ゲールムアール』が無事である限り、三神は次元の狭間から出てこれない。あなたが見たのは、ガンド……次元の狭間はどの次元にも属さないけれど、全ての次元に接しているのよ。理論上は、どの世界からああやって次元の亀裂から見ることがある。でも、あの程度の隙間では抜け出すことはできないし、修復するのも簡単だわ」

「じゃあ、そいつらがいなくなつて、お前の世界は平和になつたん

だ

「……」

康平の言葉に、未明は目を伏せる。

「違うのか？」

「三神の脅威はなくなつたわ。眷属も段々とその数を減らせていった」

「じゃあ、いいじゃないか」

そう言った康平だが、ふと、当然の疑問を抱く。

「……なんで、お前は追われているんだ？」

世界を救つた者として、左団扇で暮らせる筈ではないのだろうか。新たな神として崇め奉られてもいいくらいだ。だが、現実に、未明は別の世界にまで逃げてきている。

「確かに平和になつた　一時は。でも、『旧き神々』を封じてしばらくして……私の中の『グールムアール』を欲する者と、三神の復活を望む者、そのどちらも阻止しようとする者の三者が争つようになつていったの」

「復活を望む者？　そんな奴らがいるのか？」

「そう。……アレイスは『グールムアール』を欲する者　『求道者』の一人。彼らはとにかく魔術を極めることに心血を注ぐ人たちで、三神を封じた時の立役者でもあるわ」

「その『グールムアール』ってやつを、そいつにやつちまえばいいんじゃないの？」

「言つたでしょう？　これは、私だから受け入れられたつて。ダメなことが判っているのに……みすみす死なせるわけにはいかないよ」
別にいいだろう、というふうに、康平は肩を竦める。彼からすれば、好きなようにやらせてやって、いつそ全滅してしまえば敵が減るだろうに、としか思えない。

だが、未明は彼らを擁護する。

「彼らは、アンサムを救つた功労者でもあるのよ」
彼らの知識がなければ、『グールムアール』の生成は不可能だつ

た。とてもではないが、未明には康平のようには考えられない。

「……もう一派は、元々『旧き神々』をまさに神として崇めていた者 『崇拜者』。キンベルは彼らからの刺客ね。力あるモノに仕え、その糧となるのも辞さない人々」

「そんな奴らがいるのか」

「ええ。『旧き神々』の一部になれるのは至上の幸い、と考える人たちよ。私を殺せば『グルムアール』も消滅するから、三神を解放できる。だから、躍起になって私の命を狙ってくるわ」

「でも、自分の世界だったら、そいつらから守ってくれる者も多かつたんだろ？ 何で出てきちまつたんだ？ 命を狙われるにしても、守ってくれる者もいるならそこにいた方がよかつたんじゃないの？」

至極当然の康平の疑問だと思われるが、未明は力なく笑う。

「だつて…… 『私のせいだ』 人同士が殺し合うのよ？ 三神を封じるために命を落とす人は見ていられても、私のせいで死んでいく人は、もう見たくなかつたの。諸悪の根源がなくなれば、戦いは無くなる筈じゃない。誰か追いかけてくるとしても、次元を跳んで界を渡れるほどの力を持つ人なんて滅多にいないから、充分逃げ切れると思つてた」

「 えらい貧乏くじを引いたもんだな」

生まれつきの体質のせいだ、自分の国どころか世界から逃げ去らなければならぬなど、貧乏くじ以外の何ものでもない。半ば憐れみを込めた康平の言葉に、未明は少し考えてから首を振った。

「うん、そうだね。……でも、やっぱり、私はこの身体で良かったと思う。そうでなければ、まだ、アンサムは『旧き神々』に脅かされていて、いずれ滅びてしまっていただろうし……もしかすると、アンサムが滅ぼされた後には、別の世界が同じ目に遭っていたかもしれない。普通だけど何もできない自分よりも、ずっといい」

昂然と頭を上げてそう断言した未明の眼差しの強さを、康平は直視できない。彼女に比べて、自分の身を振り返る。未明の『逃亡』

は、ある意味『戦い』だ。だが、彼のは過去も現在も、『ただの』逃げばかりだった。同じ逃げるにしても、大きく違う。

なら、未来は、どうだ？

逃げてばかりの自分でも、この少女の助けになってやれるなら、少しは何かが変わるのではないか。康平自身のための、打算が入った動機であることは重々承知だ。だが、独りで戦う未明のために何かをしたいという気持ちも、紛れもない真実だった。

話すべきことは全て言葉にした未明は、それきり押し黙る。後は康平に全ての判断を委ねる構えのようだった。

お互いに物思いにふけたまま、夜は静かに明けていった。

翌朝一番に新宿へ帰った二人は、その足で門屋のもとへ寄った。当然、キンベルや化け物の話などできるわけもないので、結局何も見つからなかった、とだけ報告する。

「そっかあ、残念。何かあればよかったのに……。まあ、情報なし、ということなら、今度何か僕のお願いを聞いてやってよ」
「……わかった」

何か変なことを『お願い』されそうだったが、今回、いかにも門屋が好みそうな話を黙っているという罪悪感もあって、彼の言葉に康平は素直に頷いてしまった。

ふと顔を上げた門屋が、まじまじと康平を見つめる。

「……康平君、何かいいことあった？」

「はあ？ 何で」

「いや 何となく……雰囲気が違うから」

「別に、何もねえよ。こんなガキと一緒にの工程で、どんな『いいこと』があるってんだよ」

「まあ、そりゃそうか。康平君の好みは、ボンキュッポンドもんねえ。間違っても、ツルンペタンではないよね」

恐らく話題の対象にされているのであろう少女は、康平の後ろで眉間に皺を寄せる。

「当たり前だろ。じゃ、また何かあったら教えてくれよ」

そう締めくくって、門屋のもとを出て、帰路に着く。

「……私だって、本来の姿なら、もっとちゃんとしてるんだからね」
歩き始めてしばらく経った頃、未明がボソリと呟いた。

「ああ？」

「……なんでもない」

見下ろすと、微かに口が曲がっている。

どうやら先ほどの話題で拗ねてしまったらしい、と康平は苦笑す

る。確かに、おぼろげな記憶の中では、初めて会った時の未明は容姿だけでなくスタイルもかなりそられるものがあったかも……と思いかけ、康平は内心で慌てて首を振る。

今、目の前にあるのはこの姿だ。そこに妙齡の女を重ねると、なんだかへんな気分になってしまう。未明はこの見た目でいてくれた方が、康平にとっては色々都合が良い。

敢えて何も突っ込まず、康平は無言で通す。

結局二人は、家に着くまで一言も交わさなかった。

小旅行から戻って、数週間が過ぎた。

門屋からめぼしい情報もなく、進展のないまま日々が過ぎている。その日、康平は、鮮やかな夕焼けの中でベランダに立つ未明に気付いた。

彼女はジッと空を見つめている。

「どうした？」

「うん……多分、今日……」

振り返りもせずにそれだけ言って、また押し黙る。

康平もベランダに出て未明と同じ方向に視線を向けてみたが、群青色に染まり始めた空以外には特に何も見当たらない。見下ろした未明の横顔は、厳しく引き締められていた。

もう一度未明に問いかけようとしたところで、電話が鳴る。

「はい？」

「黒木さん？」

「そうだけど」

「あ……わたし、佐々木です。佐々木幸子です。覚えてらっしゃいますか？」

「ああ、覚えてますよ。どうですか、その後」

電話の佐々木幸子とは以前の依頼主で、DVの元夫から守ってやった女性だ。夫は散々な目に合わせて、二度と幸子には近づかないと誓わせた。もう、かれこれ半年ほどが経っている。

「それが……あの、助けて欲しいんです。あの人、また……キヤアッ」

電話の向こうから何かを叩きつけるような音と、彼女の悲鳴が届けられる。平穩に暮らしているのかと思っていたが、どうもそうではないらしい。

「懲りないヤツですね。今、どこに？」

「自宅です。お願いです、わたし……」

聞こえてくるのは啜り泣きだ。

「わかりました。すぐに行きますんで」

電話を切って、未明を振り向いた。

「俺、ちよつと出てこないとなんだけど……」

「大丈夫。私は家にいるよ。ここは魔力を持つ者を弾く結界を組み立ててあるから、キンベルもアレイスも入ってこれないの」

「そうか……？」

それでも、康平には不安が残る。しかし、幸子も放つてはおけないのは確かだ。

「携帯は持つてるよな？ 何かあったら、すぐに俺を呼べ。あと、何があっても、それは絶対に持つておけ。手放すなよ？」

しつこいほどに念を押す康平に、未明は笑って手を振る。

「大丈夫だつて。これでも、今までは独りでやり過ごしてきたんだから。ほら、急いでるんでしょ？ 早く行つてよ」

未明にそう言われても、後ろ髪を引っこ抜かれるような感覚は消せない。だが、康平は諦めの溜息をつくとき、バイクの鍵を取った。

「いいか、すぐに片付けてくるからな」

「わかった、わかった。いつてらっしゃい」

彼の過保護さに苦笑する未明に見送られて、康平は玄関を出る。

バイクに飛び乗ると、帰宅ラッシュで混雑する車の間を擦り抜けて幸子のアパートへ向かった。康平のマンションからは十分ほどかかる。

幸子の部屋に着くと、取り敢えずドアベルを鳴らしてみる。ドアが壊された形跡などはないが、中からの返事もない。

「幸子さん？」

声をかけて、ノックをしてみる。ノブを回しても、ドアには鍵がかかっていた。

部屋の中で意識を失っているのだろうか。

康平はピッキングの道具を取り出すと、ものの数秒で鍵を開ける。

日が沈みきつたにも関わらず電気が点けられていない部屋の中は暗く、康平は油断なくあたりに目を配りながら手探りで照明のスウィッチを見つける。

明るくなつた部屋の真ん中には、携帯電話を手にしたまま、幸子が崩れ落ちていた。

「幸子さん？」

上体を抱えあげると身体は温かく、呼吸もしっかりしている。軽く全身に目を走らせても、特に怪我をしている様子もなかった。

「幸子さん」

ピタピタと何度か頬を叩くと目蓋が震え、ゆっくりと目が開かれる。

しばらく彼女はボウツとしていたが、視線の焦点が合うとびっくりしたように目を見開いた。

「黒木さん!？」

康平は答えるように頷く。だが、幸子はまるで見当がつかないようにパチパチと瞬きするばかりだ。その様子に、彼の中に嫌な予感が溢れ出してくる。

「幸子さん、覚えてますか？ あなた、俺に電話をしてきたんですよ」

「え!？」

案の定、彼女はさっぱりわからない、という様子で声をあげる。

「旦那がまた来ている、と言ってましたが」

「まさか！ 黒木さんが追い払ってくれてから、彼はあれつきり姿を見せてません」

予想通りの返事に、康平は舌打ちをする。どうやら、やられたらしい。

「俺の勘違いだったようです。無事なら、良かった。じゃあ」

それだけ言うと、何がなんだか解らないままの幸子を置き去りに部屋を飛び出した。

アレイスカ、キンベルか。

どちらにしても、未明は対応できる筈だ。しかし、康平は嫌な予感を拭えない。

ふと空を見上げると、真円の月が明るく輝いている。

「変態金髪野郎の方が……」

問答無用で殺そうとしないだけ、マシなのかもしれないが。

康平はバイクに跨ると、一散にマンションを指す。

エレベーターを待つのももどかしく十五階の自室に着くと、廊下の先からでも部屋の戸が開いているのが判った。

部屋に走りこむと戸は外から破られた形跡があり、室内は複数の者が乱入した様を呈している。

「くそッ」

毒づいて、康平は携帯を取り出す。未明に渡した携帯のGPSは生きていた。それが示しているのは康平のマンションではない。だが、そう遠くない地点だ。

康平はすぐさま部屋を飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2088y/>

暗黒神話

2011年11月21日23時48分発行